

<p><b>あくび</b></p> <p>中川ひろたか／文 飯野和好／絵 文溪堂（1999.10）</p>	<p><b>おおきなかぶ</b> ロシア民話 A.トルストイ／再話 佐藤忠良／絵 福音館書店（1966.6）</p>
<p>はじめにかばがあくびをしたよ。フワー。それを見たきりんにあくびがうつる。フワー。そうにも、さるにも、運転手さんにも。とうとうパパやママにまであくびがうつり、それを見たほくもフワー。読み終わるころには、本当にあくびが出てきて涙目になってしまう、なんとも不思議な絵本です。</p> <p>どのページの絵も、インパクトのある表紙に負けず劣らずの大迫力。でも、「おやすみなさい」の前に読むおまじないのようなお話に、ほっこりあたたかい気持ちになります。ユーモアあふれる絵本の楽しさを存分に味わえること、請け合いです。</p>	<p>おじいさんがかぶを植えました。「あまいあまいかぶになれ。おおきな おおきな かぶになれ」。おじいさんの願いがかなって、立派なかぶができました。</p> <p>ところが、大きくなりすぎて。おばあさん、まご、いぬ…と次々に仲間を呼んで手伝ってもらいますが、かぶはなかなか抜けません。さて、どうなることやら。</p> <p>繰り返し出てくる「うんとこしょ どっこいしょ」のかけ声に、聞き手もいつの間にか声を合わせて、思わず力が入ります。</p> <p>ロシア民話の世界が深みのある色彩で描かれ、ページの真ん中にどっしりとすえられたかぶの絵は、重量感もたっぷりです。</p>
<p><b>おっぱい</b></p> <p>みやにしたつや／作・絵 すずき出版（1990.5）</p>	<p><b>かいじゅうたちのいるところ</b></p> <p>モーリス・センダック／作 神宮輝夫／訳 富山房（1975.12）</p>
<p>ぞうさん、ねずみさん、ごりらさん…見開きいっばいに描かれた動物のおっぱい。ページをめくるとそれぞれの親子の授乳の様子が。</p> <p>「たくさんので おおきなあれ」「たくさんので つよいこになあれ」という優しい語りかけは、子どもの成長を願うお母さんの愛情にあふれています。</p> <p>そして最後に出てくるのは、「やわらかくてあったかい おかあさんのおっぱい」「ぼくがこのまえまでのんでいた おっぱい」。でも今は…？</p> <p>裏表紙に描かれた、少し大きくなった「ぼく」の誇らしげな姿が何ともほほえましく、温かい気持ちになれる1冊です。</p>	<p>お母さんにしかられて部屋に閉じ込められたマックス。部屋に木が生え出し、波が打ち寄せ、マックスは海を航海して怪獣たちのいる島へたどり着きます。魔法を使って、恐ろしい怪獣たちの王様になってしまうマックスですが、そろそろ誰かさんが恋しくなります。</p> <p>「帰らないで」と怪獣たちに泣いて頼まれるマックスが帰り着くところは…？</p> <p>子どもの好きな「怪獣」をテーマにした絵本です。現実から空想の世界へ、短い言葉とていねいな絵が想像する力をかき立ててくれます。</p> <p>自立、冒険、ファンタジーなどいろんな要素を含むこの作品は、幅広い年齢の子どもたちをひきつけるようです。</p>

**ぐりとぐらのおきゃくさま**なかがわりえこ／文 やまわきゆりこ／絵  
福音館書店（1967.6）

森の中で雪合戦をしていた野ねずみのぐりとぐらは、大きなあしあとを見つけました。それがだれのものかを調べることにした2匹は、雪の上についているながぐつのとをたどって行きました。森を抜けて歩いて行くと、そこはなんと自分たちのお家でした。中に入っていくと、大きなながぐつや赤い帽子、てぶくろなどがあちこちに…。果たしてそのおきゃくさまとは？



ロングセラー絵本の定番「ぐりとぐら」シリーズのうちの1冊。このほか、「ぐりとぐらのえんそく」、「ぐりとぐらのおおそうじ」など、数多く出版され、長い間みなさんに親しまれています。

**ちびゴリラのちびちび**ルース・ボーンスタイン／作 岩田みみ／訳  
ほるぷ出版（1978.8）

小さなかわいいゴリラがいました。お母さんも、お父さんも、おばあさんも、おじいさんも、生まれたその日からこのちびゴリラの「ちびちび」が大好きでした。家族だけでなく、森の動物たちもみんな、ちびちびが大好きでした。そんなある日、何かが起こりました。ちびちびが大きくなりはじめたのです。どんどんどんどん大きくなって…



家族や森のみんなのちびちびを見つめるまなざしがとても優しく描かれています。みんなから愛され、温かく見守られながら、すくすくと成長していくちびちびの姿が愛らしく印象的です。どんどん大きくなっていても、ちびちびはちびちび。みんなのちびちびへの「大好きだよ」という気持ちは、ずっとずっと変わりません。

心温まるすてきな絵本です。

**てぶくろ ウクライナ民話**エウゲーニー・M・ラチョフ／絵  
うちだりさこ／訳  
福音館書店（1965.11）

雪の降る森の中を歩いていたおじいさんが、てぶくろを片方落として行ってしまいます。それを見つけたねずみが、てぶくろにもぐりこんで暮らすことにしました。そこへかえるがやってきて、「わたしも入れて」と言うと、「どうぞ」と入れてくれました。

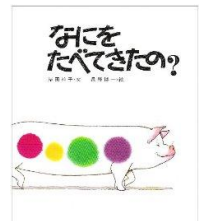


次にうさぎ、きつね、おおかみ、いのしし、最後にはくままでやってきて、てぶくろは、もうぎゅうぎゅうづめです。

ウクライナの冬の森を背景に民族衣装を着た動物たちが小さなてぶくろに次々とおさまっていくのが楽しいおはなしです。季節感たっぷりで冬の読み聞かせにおすすめの1冊です。

**なにをたべてきたの？**岸田衿子／文 長野博一／絵  
佼成出版社（1978.5）

おなかのすいたしろぶたくんが食べ物を探しています。リンゴを見つけて食べました。すると、おなかにリンゴの色が透けて見えます。まだおなかですいているしろぶたくんは、次にレモン、メロン、ブドウを食べます。そのくだもの色は、やっぱりおなかから透けて見えます。それでも足りないしろぶたくんは、とうとう、せっけんまで食べてしまいます。さあ、どうになってしまうのでしょうか？



食べ物を探しに行く途中で、いろんな種類のぶたくんに出会うのを見るのも楽しい絵本です。色使いはやさしく、シンプルできれいな作品です。

**はなをくんくん**

ルース・クラウス／文  
マーク・シーモント／絵 きじまはじめ／訳  
福音館書店（1967.3）

まだ雪深い山の中、冬眠中の動物たちがふと、何かの香りに誘われて目を覚まします。のねずみが、くまが、ちっちゃなかたつむりが…「みんなはなをくんくん。みんなかけてく」さあ、その先にみんなが見つけたものはなんでしょう？



優しい言葉の繰り返しは、まるで詩のよう。モノトーンながらどこか温かみのある絵と相まって、美しい世界を作り出しています。

春の訪れを予感させてくれるすてきな絵本です。お子さんと一緒に絵本の中で小さな春を見つけてください。

**はらぺこあおむし**

エリック・カール／作 もりひさし／訳  
偕成社（1976.5）

満月の夜のこと、葉っぱの上に小さなたまごがひとつ。日曜日の朝、そのたまごからちっけなあおむしが生まれました。おながかべこぺこのあおむしは月曜日から毎日、色々な種類の果物やおかし、チーズやソーセージなどを次から次へと平らげていきます。とうとうおながか痛くなったあおむしは、おいしい葉っぱを食べて具合もよくなり…。



横長の大きな絵本には、サイズの違うページがあったり、あおむしの食べ穴が開いていたり、楽しいしかけがほどこされています。また、画面いっぱいに描かれたカラフルな絵は、最後のページで思わず感嘆の声がもれるほど美しいものです。

**みんなうんち**

五味太郎／作  
福音館書店（1981.2）

いろんな動物がいろんなうんちをします。形も色もおいもみんな違います。うんちをする場所もうんちの仕方も、みんなそれぞれ違います。



子どもたちが大好きな「うんち」という題材を、わかりやすいテンポのよい文章と、丁寧な描写で色彩豊かに描いています。

「いきものはたべるから みんなうんちをするんだね」食べたらうんちが出る。生きていればどんな生きものでも、みんなうんちをすることが自然なんだ。そんな当たり前だけど、大事な自然の原理を、簡潔明瞭に表現しています。

ユーモラスにそしてシンプルに、とても大切なことを教えてくれる1冊です。

**ロンパーちゃんとうんせん**

酒井駒子／作・絵  
白泉社（2003.3）

町で黄色い風船をもらったロンパーちゃん、飛んでいってしまわないようにと、指にくくって大事に家に持って帰りました。さあ、おうちでいっしょに遊びましょ。「あらあら」風船はお部屋の上へ飛んでいきます。困った風船にお母さんがひと工夫、「これならいっしょにあそべる」。



ところが、今度はピュー！と風が吹いて、風船は木にひっかかってしまいます。風船とあれもしよう、これもしたいと思っていたロンパーちゃんは涙にくれますが…。

フリーハンドで描かれた枠内に、グレーを基調とした色彩、その中で黄色の風船はとても美しく映えます。何よりもロンパーちゃんのかわいらしさが物語を引き立てます。本を閉じた後も物語の余韻に浸れるすてきな1冊です。